
魔法少女リリカルなのはStrikers 手を伸ばす者

天才

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 手を伸ばす者

【Nコード】

N6949W

【作者名】

天才

【あらすじ】

J・S事件から3ヶ月、機動六課に新たな任務が出される。それは地球の海鳴市で発見されたロストログアの回収だった。そのロストログア事件と大きく関わってしまう青年 白岬海斗 と機動六課、そしてゾンビの物語

序幕 始まり（前書き）

初投稿です。

なのはの世界観壊さないように頑張りたいと思います

序幕 始まり

海鳴市。

その町にあるとある美術館にはアルプス山脈の遺跡から発掘されたものが展示されている。

あるものは錆びた剣や盾であつたり、あるものは輝きをなくした宝石などであつたりと様々な種類の展示品がある。

しかし、遺跡から発掘されたものがすべて展示されていない。いくつかのものは極秘に扱われ美術館の地下に厳重に保管されている。その地下室で

「いよいよだぜ」

「ああ、いよいよ俺らは億万長者だ」

1人は痩せっぽっち、1人は逆にポツチャリな体型をした男がいた。2人は大きな袋を持っており中には展示品が入っている。

どうやら美術館に盗みにきたようだ。

「おい、あれ物凄く高く売れるんじゃないか」

痩せっぽっちの男が興奮気味に言い、それに指を指す。

そこには古代のものにも関わらずきらきらと光る宝玉が12あつた。

「確かに高そうだな。どれ」

ポツチャリな男はそういい、宝玉のひとつに手をかけた。

瞬間

「なんだ、この光は」

突然12の宝玉は強く光りだした。

「ウワアアア」

2人の男は悲鳴を上げ、宝玉は天井を突き破り、四散した。

序幕 始まり（後書き）

難しい。

でもとりあえず週1のペースを目標にやっいていこうと思います

第一場面 青年、熊に襲われる。（前書き）

目標周ーとか言ってたのに1ヶ月後になってしまいました。これからは不定期にやっていこうかな。

構成色々考えてみたらこれゾンとのクロスが面白いなと思ったのでクロスさせました。

第一場面 青年、熊に襲われる。

「なんなんだ。これは」

俺は目の前で起きている光景に驚嘆していた。

「なんで学ラン着ている熊がいるんだよ」

しかもこの熊、なんと美術館の展示物を両手に抱えて嬉しそうだ。ちよつと可愛い。

だけど

「どうすればいいんだ、あれ」

美術館の中に熊なんかいたらきつと大騒ぎになるだろう。

俺がそうこう考えている内に熊はこっちに気付いたのか凝視してくる。

そういえば俺、あの熊に襲われたら終わりじゃね

そう思った瞬間だった。

「マソウシヨウジョ」

「うお」

熊が飛び掛かってき、咄嗟に転がって避ける。

「やべえ」

足が痛い。どうやらくじいたようだ。

熊はそんな俺を無視して襲い掛かろうとする。

何か武器となるものを手に取ろうと咄嗟にそれをつかんだ。

「Protection」

無機質な声が聞こえた。

その瞬間障壁がでて熊を弾き飛ばした。

「なっなんだ」

右手で掴んだものを見てみるとそれは真珠だった。

「マスターの設定を行います。あなたの御名前は」

「えっ『白岬 海斗』だけど」

なに普通に答えているんだ俺は

「次にあなたの防護服をイメージしてください」

「防護服？」

「戦闘時に着る服です。早くイメージしてください」

以前ラノベで読んだ主人公の服を想像する。

「最後に呪文を唱えてください」

「呪文？」

「はい、わたしのあとに続いて言ってください」

バイト中に学ラン着た熊に襲われるはなんか変なやつになんか言われていたり、いろいろとわけわからないが

「とりあえずやってやるぜ」

そして俺は呪文を唱える。

「「ノモブヨ ヲシ ハシタワ ドケダ グンニーチャ デ リブ
ラ」」

呪文を唱えた瞬間、俺の身体は光に包まれた。

お約束の変身シーンですねって思ったが光に包まれたのは一瞬のことであった。

「マジかよ」

俺の服装が想像した、ぶっちゃけていうと『伝勇伝』のライナの服装になっていた。

「来ます」

弾き飛ばされた熊が再び襲い掛かってくる。

「Protection」

熊の攻撃を障壁が防ぐ。

「お前がやってるのか」

「はい。マスターの魔力を貰い、障壁を張っています」

俺、魔力なんて大層なものをもってたのか。

「あれ、倒せるのか」

「はい。これにマスターの魔力を込めて攻撃してください」

真珠が光だし、二丁銃に変わった。

「とりあえず、死なない程度にやってやる」

魔力を込めるといふのはどういう感じかわからなかったがとりあえずトリガーを引いてみた。

すると魔力の弾らしきものが出て熊に当たる。

「おい、全く効いてないじゃないか」

熊は驚く程ピンピンしていた。むしろ喜んでないか、あれ。

「それはマスターがあまり魔力を込めてないからです。もっと強いイメージをしてください」

なるほど、さっきのは威力がなかったから効いてなかったのか。だったら

「これならどうだ」

俺は再びトリガーを引いた。

さっきよりも強く、より明確なイメージで。

弾は熊に当たると

「爆発したあああ!？」

「マスター、魔力をこめすぎです」

轟音が鳴り響いていた。熊は今ので吹き飛んだのかいなかった。

「とりあえず逃げたほうがいいのか」

「はい。そのほうがいいのかと」

「だよな。よし逃げよう」

俺は足をくじいたことも忘れ、全力で逃げた。

だってあんなことになるとは思わなかったか。バイト先の美術館を壊したなんて言えないじゃないか。

俺は急いでなるべく遠くへ逃げだしていた。

第一場面 青年、熊に襲われる。（後書き）

まだ原作キャラは出てこんぞ。多分。

第二場面 ゾンビ いざ異世界へ（前書き）

早速我らのゾンビ様の登場

えっ？そんなもの望んじやないって？

私もそう思います。

ゾンビ「おいっ作者、それはどういつ」

それではスタート

第二場面 ソンビ いざ異世界へ

「起きろ！アユム」

ボタン！と音を出し誰かが部屋に入ってくる。

全く、夏休みだというのにこんなに朝早く起こすな。だから俺は構わずに寝る。

「早く起きろ。アユム」

可愛らしい声の主が俺を蹴る。それでも構わず俺は寝る。

「早く起きろって言ってるだろ。バユム」

声の主は遮光性のカーテンを開ける。

すると朝日が差し込んでき

「ギヤアアアアアア。溶ける。」

俺は焼けるほどの痛みを感じた。それこそ溶ける程に。

「早く起きないからだ。バユム」

「わかった。起きた。起きたから」

俺は必死に懇願する。

「早くカーテンを閉めるんだ」

ヤバイ。意識が遠退いてきた。

あつ俺、相川 歩はゾンビっす。あと、魔装少女っす。

「瞬間転送装置?!」

今朝の騒ぎからからしばらくしたあと、俺は居間にいた。

「そうだ。あたしが作ったんだ。すごいだろ」

小さな胸で胸を張り、アホ毛がチャームポイントのハルナが自慢する。

だから俺を叩き起こしにきたのか。

「すごい」

簡素な文字を書いたメモ用紙を見せる少女、ユーが言った。

ガントレットにプレートアーマーに長い銀色の髪、西洋を感じさせるユーはある事情があつて言葉を発することができない。

だからこうやってメモ用紙を使って意志伝達をする。

（本当、すごいよね。お兄ちゃん）

だから俺もこうやって頭の中で可愛くする。やっぱりユーは可愛い。

「ヘルサイズ殿の言うとおり、本当にそのようなものを作ったのなら確かにすごいですね」

凜々しい声でそうハルナに言うのはセラ。

長いポニーテールにこれ以上ないスタイルを持っている。

「なんですか、歩。そんな気持ち悪い目でこちらを見ないでください。くそ虫」

相変わらず凜々しい御方の様で軽蔑するかのような眼差しでこちらを見てくる。

まあ、いつものことなのであまり気にしたらいけない。

それよりも

「その瞬間転送装置とやらはどこにでもいけるのか？」

「あつたり前だろ。あたしを誰だと思つてんだ。天才魔装少女のハルナちゃんだぞ。不可能なことなんかないんだぞ」

アホ毛が元氣よく跳ねながら偉そうに腕を組んでハルナが言う。

「その装置、今すぐ使えるのか？」

俺は内心ワクワクしていた。だってそうだろ。あの国民的アイドルともいえる猫型ロボットが持っているどこにでも行けるドアが目の前にあるんだ。早く使ってみたいだろ。

「使えるけど。アユム、エロ目的で使うわけじゃないだろうな」
ハルナが顔をしかめる。

「そうやって勝手に決め付けるな。ただ俺はどんだけすごいものなのか確かめただけだ」

あらぬ疑いをかけないで欲しい。

「私も使ってみたい」

ユーもこう言っている。

「ハルナ。どうしても心配だというのならこのくそ虫は私が見張っておきます。なので使ってください」

セラも賛同する。ってそこまで信用ないのか、俺。

「根暗マンサーと葉っぱの人がそこまで言うのならしゃーなしだな。感謝しろよな、アユム」

そんなこんなで装置を使うことになりました。だけどこのことを後悔することになるとは思わなかったな。

いや、この時点で気付くべきだった。

「よし、みんなあたしの周りに集まれ」

ハルナがそう言い、俺たちは言われたとおりハルナの周りに集まる。

「よし、じゃあ転送」

「おい、いきなり転送させるな。せめてどこに行くのか教えてくれ」
俺がそう言うがもう遅い。

既にハルナはひと昔前の携帯程の装置装置を動かし、俺達はその場から消えていた。

「うつ、ここは」

俺は目を開け、身体を起こした。どうやらあのまま気絶したようだ。時差のせいなのか、それとも俺がそれだけ長い間気絶していたのか昼間だったはずなのに夜になっていた。まあゾンビにとっちゃあそのほうが都合がいいが。

「ここはどこだ？」

俺は今、全然見知らぬ森の中にいた。

やっぱりハルナにどこに行くか聞くべきだったな。

そういえばハルナはどこだ。ユーもセラも姿が見えない。

「ハルナ。ユー。セラ。いたら返事してくれ」

三人を呼んでみるが返事はない。

そのかわりに

「すいません。時空管理局の者です。あなたの身柄を一時、保護させてくれませんか」

金髪のツインテールをした女性が返事をした。

第二場面 ソンビ いざ異世界へ（後書き）

大体1ヶ月くらいのペースですね。
でもそのわりには文字数が

二次創作って難しいですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6949w/>

魔法少女リリカルなのはStrikers 手を伸ばす者

2011年11月23日17時51分発行